

ネタニヤフはなぜタカ派になったのか？

イスラエルを存亡の危機へと陥らせているネタニヤフの「狂気」の源には、彼の育った家庭の影響が大きい。彼の父親のベンシオン・ネタニヤフ（1910〜2012年）は歴史家で、米国のコーネル大学などの教授を務めたが、イスラエル国家創設のためのロビー活動を米国で行い、その著述で修正シオニズムのイデオロギーの正当性を訴え続けた。前述のように修正シオニズムは、ウラジミール・ジャボチンスキーによって創始されたイデオロギーで、現在のイスラエル、パレスチナ、さらにはヨルダンまでもユダヤ人国家が支配することを主張し、1947年の国連パレスチナ分割決議にもパレスチナ全域をユダヤ人が支配するという修正シオニズムの考えに背くとして反対した。

ベンシオンの父親のネイサン・ミレイコフスキー（1879〜1935年）はラビで、シオニストの活動家だった。ミレイコフスキー一家は、1920年にパレスチナに移住し、スラブ語のミレイコフスキーという姓をヘブライ語のネタニヤフに変えた。当時、東欧からのユダヤ人移民（アシュケナジム）はヨーロッパ風の名前をヘブライ語名に変えることが一般的だった。

ベンシオンは、1944年にツイラ・シーガルと結婚し、ヨナタン（1946〜76年）、ベンヤミン（＝ネタニヤフ首相、イド（1952年生まれ）の3人の息子をもった。長男のヨナタンはイスラエル軍の特殊部隊「サイエレット・マトカル」の司令官としてパレスチナ・コマンドにハイジャックされたイスラエル航空（エル・アル）旅客機のウガンダ・エンテベ空港での救出作戦を指揮した。この作戦では106人のイスラエル人人質のうち102人が救出されたが、ヨナタンは救出作戦を担ったイスラエル軍の唯一の戦死者となった。ベンヤミンにとってヨナタンは大きな存在で、彼がパレスチナ人との戦闘の中で亡くなったことも、ベンヤミンのパレスチナ人に対する見方を決定づけることになった。

「兄ヨナタンは私にとっての北極星だった。迷路のような人生を導く見習うべき模範だった。ヨナタンがいる限りイスラエルという国の未来を確かなものにしてくれると感じていた」が、ヨナタン戦死という報を受けた時にベンヤミンは「私の人生が終わったように感じた。もう立ち直れないと思った。兄の犠牲が私を戦いに駆り立ててそしてイスラエルで最も長く首相を務めるまでに導いたのだ」と述べている。

（NHK「映像の世紀 バタフライエフェクト イスラエル」より）

ベンシオンは戦闘的な修正シオニズム思想の信奉者だった。ウラジミール・ジャボチンスキーは1923年にパレスチナのユダヤ人はアラブ人との間に強力な「鉄の壁」を築き、アラブ人に対して武力で優越し、防衛に優れたユダヤ人国家創設を説いたが、そうしたアラブ人との対決姿勢をベンシオンは支持し、イギリス支配と宥和的シオニストたちを批判するようになった。ベンシオンは1940年にジャボチンスキーの秘書の助手となるために米国に渡ったが、ジャボチンスキーが間もなく亡くなったために、米国のタカ派のシオニスト組織の事務局長となり、イスラエル建国の年である1948年までその職にあった。米国の修正シオニズム運動の指導者の一人となり、また米国の国会議員たちがシオニズムを支持するようにロビー活動を熱心に行った。

ベンシオンは、フィラデルフィアのドロプシー・カレッジ・フォー・ヘブライ・アンド・コグネイト（同胞）・ラーニング (Dropside College for Hebrew and Cognate Learning in Philadelphia・現在のペンシルベニア大学高等ユダヤ研究センター) で、スペインからのユダヤ人追放に反対したユダヤ人学者で、政治家のアイザック・アバルバネル(1437~1508年) に関する論文によって博士号を取得した。1949年に独立間もないイスラエルに戻ると、アラブ人に対する強硬な見解を次々と発表するようになり、イスラエル国内のアラブ人は

我々の絶滅を図るだろうと主張したり、イスラエル・パレスチナからのアラブ人の追放を明確に訴えたりした。アラブ人の本性は紛争を行うことにあり、アラブ人には妥協という観念がなく、イスラエルの本来的な敵であることをベンシオンは熱心に説いた。

1957年に米国に再び渡ってドロプシー・カレッジ、デンバー大学、コーネル大学で教職にあったが、ヨナタンの死とともに1976年にイスラエルへ戻った。

イスラエル社会は当初、長らく与党だった労働党の支持者たちにベンシオンのような東欧や中欧からの「アシケナジム」といわれるユダヤ系移民が多く、労働党はキブツと呼ばれる農業共同体の中で平等を実現する社会主義思想によって方向づけられていた。このキブツ社会主義は、社会主義の最も成功した例として逸話的に語られることも多い。「セファルディム」は、元々はイベリア半島に居住し、スペイン王国の1492年3月のユダヤ人追放令とともに、アフリカ、中東、アジアなどに離散していったユダヤ人たちが、このセファルディムの人口が1950年代になると、イスラエル国内で増加していった。イスラエルの政治・社会における支配階層はアシケナジムだったが、「二級市民」とも言うべき立場に置かれていたセファルディムはアシケナジムに対抗するように、右派政党のリクードを支持し、リクードはその党勢を拡大していった。

アラブ人に対する強硬な見解によってアシケナジム社会から疎外されていると感じていたベンシオンは、自らがアシケナジムであるにもかかわらず、セファルディムに接近していった。多くのユダヤ人歴史家がスペインのユダヤ人はキリスト教への改宗を強制されたにもかかわらず、生存のために秘密裏にユダヤ教の信仰を保持する「マラーノス（単数形はマラーノ・豚の意味）」となったと解釈するのに対して、ベンシオンは彼の主著である『15世紀スペインにおけるスペイン異端審問の起源 (The Origins of the Spanish Inquisition in fifteenth century Spain)』の中でスペインのユダヤ人は自ら主体的にキリスト教徒になったと主張した。

1481年に異端審問が開始されるまでにごく少数しかユダヤ人はイベリア半島に存在しなかったとベンシオンは解釈し、ユダヤ教徒などを摘発するための異端審問は、スペイン王国の絶対的な権力を維持するために、ユダヤ人に対する人種主義と経済的な嫉妬に動機づけられていたと述べ、キリスト教への改宗はスペインのユダヤ人を救うことにはならなかったとベンシオンは考えた。スペインでは1802年にも300年以上も前の「ユダヤ教徒追放令」が繰り返され、ユダヤ人の子孫とされた者の商店や宝石工房が襲撃され、略奪されるといふ事件が発生し、ユダヤ人に対する人種的差別観や弾圧は続いていた。(https://hemes-ir.ihb-hi-u.ac.jp/hemes/ir/re/12026/fronsol160402000.pdf Depending on how you interpret B. Netanyahu's

book, it has two 'morals'.)

19〜20世紀にキリスト教に改宗したユダヤ人たちもナチスのホロコーストを免れることがなかった。アシケナジムのユダヤ人は手遅れになる前にヨーロッパを離れるようにというウラジミール・ジャボチンスキーの警告に耳を傾けなかったとベンシオンは訴え、これらの人種差別や弾圧の歴史があるにもかかわらず、ユダヤ人は1948年や67年におけるイスラエルのアラブ諸国への戦争勝利のために、楽観的になり過ぎているとベンシオンは考えた。ベンシオンには、味方のいないユダヤ人はユダヤ人自らの手によって守らなければならないという確信があり、それは息子のベンヤミンにも引き継がれていた。対話ではなく武力を優先するネタニヤフ首相の在り方には、このような信念を背景としている。

「鉄の壁」に基づくネタニヤフのタカ派思想

イスラエルで最も長い任期の首相となったベンヤミン・ネタニヤフは、1949年10月にテルアビブで生まれたが、1963年に父ベンシオンの仕事に伴って米国フィラデルフィアで生活した。1967年にイスラエル国防軍に入隊し、特殊部隊のサイエレット・マトカルの兵士となり、1972年にテルアビブ・ロッド空港のハイジャック機救出作戦にも参加し

た。1976年に米国マサチューセツ工科大学(MIT)のMBA(経営学修士)を取得し、1976年に兄ヨナタンがウガンダ・エンテベ空港の人質救出作戦で死亡すると、テロリズムに関して研究を行う「ヨナタン研究所」を創設した。

1988年にリクード党員として国会議員に初当選し、1988年から1991年まで外務次官の職にあり、1991年から1992年に首相府次官となった。1993年にリクード党首となり、1996年にイスラエル初の首相公選制で、労働党のシモン・ペレスに僅差で勝利し、イスラエルで初めて独立後に生まれた、最年少の首相となった。

その後のネタニヤフの首相職は大きく分けて1996年から1999年の第一期と、2009年から2021年の第二期、また2022年12月に始まる第三期に分かれる。

ネタニヤフも父親のベンシオンも修正主義シオニストであり、そのイデオロギーをつくり出したウラジミール・ジャボチンスキーの「鉄の壁」という考えに共鳴している。すでに述べた通りウラジミール・ジャボチンスキーはイギリスがパレスチナを委任統治していた時代の1923年に「鉄の壁について」という論文を発表した。ジャボチンスキーは、ユダヤ人がもたらす技術的進歩や経済状況の改善が先住民のアラブ人に受け入れられるという「空想的な信念」をシオニズム運動の指導者たちにはもっていると指摘した。

ジャボチンスキーは、先住民のアラブ人たちは、ほかの先住民たちと同様に、自らの土地に乗り込んできた人々(ユダヤ人)の民族的切望などは決して受け入れないと主張した。あらゆる先住民は植民地主義者の脅威を力で排除できるといふ希望がわずかでもあれば、植民地主義者に徹底的に抵抗するだろうとジャボチンスキーは考え、シオニズムは土地の支配をめぐってアラブの民族運動と戦わなければならないと主張した。そのためにはシオニズムは「鉄の壁」というアラブ人が決して打ち破ることができない軍隊を発展させ、アラブ人にユダヤ人国家を受け入れさせなければならない、というのがジャボチンスキーの考えだった。

ジャボチンスキーが創始した修正シオニズム運動は、労働党の社会主義に対抗し、ユダヤ人の軍国主義を育成することを強調した。領土的な妥協を一切しないというジャボチンスキーは、パレスチナに土地を与える国連分割決議にも反対した。パレスチナ人をはじめアラブ世界もこの分割案に反対し、イスラエルが独立を宣言すると、即座にイスラエルとの戦争(第一次中東戦争)を開始したが、この戦争でアラブ諸国は敗れ、パレスチナ全域の80%近くがイスラエルの領土となり、ヨルダン川西岸と東エルサレムはヨルダンが、またガザ地区はエジプトが支配するようになり、イスラエル領となった土地に住んでいた過半数のパレスチナ人たちは難民として逃れるか、追放された。

1967年の第三次中東戦争はイスラエルの先制攻撃もあつてわずか6日間でイスラエルの圧倒的勝利に終わった。イスラエルはヨルダン川西岸、東エルサレム、ガザ地区、そしてシリアからゴラン高原を、エジプトからシナイ半島を占領し、修正シオニズム運動のイデオロギーが実現しうるような勝利に終わった。

1948年から1977年までイスラエル政治を支配したのは労働党だったが、1977年に修正シオニズムの政党リクードが初めて政権の座についた。人口増加が著しいアラブ諸国の脅威に加えて、支配階層であり続けたアシケナジム主体の労働党に対抗するため、セファルディムのユダヤ人たちが競合するリクードに投票した。

イスラエルの占領に対してパレスチナ占領地では1987年からインティファダが始まり、イスラエル軍はパレスチナ人の投石に対して発砲で対抗したが、イスラエル軍のふるまいは過剰なものという国際社会の批判を受けるようになった。

1992年に首相となった労働党のラビンは、パレスチナ人との和平が必要と考え、1993年にオスロ合意を成立させた。オスロ合意はイスラエルとパレスチナが共存し、パレスチナ人の自治地域を次第に拡大させ、ヨルダン川西岸とガザに、パレスチナ国家を認めるというものだった。パレスチナ人との和平はイスラエルが国際社会と円滑に付き合い、イスラ

エルを国際経済や国際秩序に融合させ、イスラエルの経済発展を図るためにも必要とラビンは考えた。

ネタニヤフがリクードの党首となったのは、このオスロ合意のあった1993年で、ネタニヤフはオスロ合意を、ジャボチンスキーが警告した領土的譲歩とみなし、ユダヤ人に対する脅威は圧倒的な力を使用することによって排除できると再三訴えた。領土的譲歩は、イスランの核兵器開発などイスラエルをめぐる脅威に対しても弱点を見せることになり、結局ユダヤ人国家の生存を危うくするものと主張した。イスラエルの強力で、圧倒的な軍事力を示せば、アラブ諸国もイスラエルの存在を認めざるを得なくなるというのが、ネタニヤフの確信だった。それは、修正シオニズムの考えに基づくもので、実際に一部のアラブ諸国がイスラエルになびくことは、2020年9月に成立したネタニヤフのイスラエルとアラブ首長国連邦との間の国交正常化「アブラハム合意」にも見られた。

ネタニヤフの修正シオニズム観はハマスに対する徹底的な勝利を収めるまで戦争を継続するという彼の主張にも見られたが、軍事力の行使はハマスやヒズボラなどイスラエルと敵対する勢力にもいっそうの軍事力の強化をもたらすことにもなり、軍事支出は伸び続けている。ネタニヤフの父ベンシオンが研究したスペイン王国ではフェリペ2世がマドリッド郊外に

築いた豪華なエル・エスコリアル修道院などの奢侈に加え、フランスとのイタリア戦争、オスマン帝国とのレパントの海戦などで戦費が嵩み、新大陸から得られた銀による富の多くが、王族の贅沢や戦費に用いられた。1588年にはスペインの「無敵艦隊」はスペイン領であったオランダの独立を支援するイギリス海軍とのアルマダ海戦に敗れ、その衰退が次第に判明していく。

このように、戦費の拡大が強大な帝国の衰退や崩壊を招くことは歴史が証明することだ。古代ローマ帝国、大英帝国、アドルフ・ヒトラーの第三帝国は、一時期は世界の大国、強国になったが、いずれ衰退していった。軍事一辺倒のネタニヤフのような修正シオニズムの発想はイスラエルを疲弊させる結果につながる。

イランとの戦争を画策し続けるネタニヤフ

ネタニヤフ首相はイランの脅威を唱え続け、イランとの戦争を否定しない発言を継続している。ガザ攻撃に見られるように、戦争によって政治的権力の維持を図るネタニヤフ首相にとって、イランとの戦争は必要と考えられているに違いない。

2024年4月1日、シリアのダマスカスにあるイラン大使館領事部がイスラエル軍と思われるミサイル攻撃を受けて、イラン革命防衛隊クッズ（エルサレム）部隊司令官のモハンマド・レザー・ザーヘディ准将ら7人が死亡し、またシリア人市民6人も殺害された。イランのハメネイ最高指導者が直ちにイスラエルへの報復を誓うなど緊張が高まった。

外交施設を攻撃することは国際法で禁じられていて、イスラエルは1982年にレバノン侵攻した際には、その正当化の理由としてロンドンのイスラエル大使が銃撃されて死亡したことを引き合いに出したが、まったくの自己矛盾だ。ネタニヤフ首相はイランを戦争に引き込むことによって、ガザ戦争に批判的となっている米国の支持を得たいという目的があるのかもしれない。

イランの保守系の新聞では、イランの外交施設が攻撃されたのだから、各国にあるイスラエルの外交関連施設を攻撃するのは、まったく正当であるという論調も現れた。イランがアゼルバイジャンのイスラエル大使館を攻撃する可能性を「BBCモニタリング」が指摘したものの、イランには米国やイスラエルとの通常戦争を戦う意図はないように見える。

2023年12月にイランのハメネイ最高指導者は、イラン革命防衛隊のムサビ（ムーサウィー）上級顧問がイスラエル軍の攻撃により、シリア・ダマスカス郊外で亡くなったことを受けて、イスラエルに対する報復に許可を与えたが、実際にイランが報復することはなかつ